



雪に映る陰影が美しいシラカバの林（札幌市南区で1月22日）

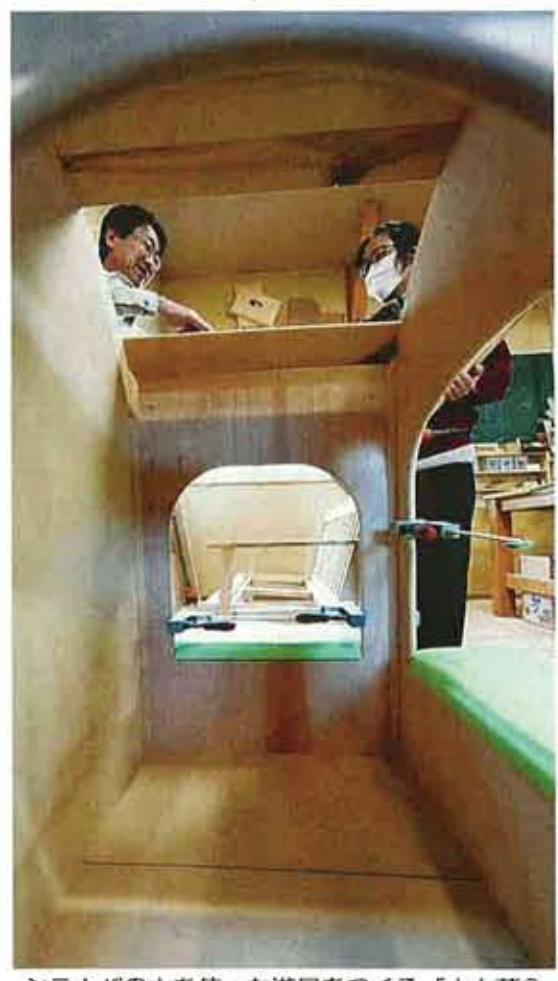


(左から) 樹皮を残した木の器。樹液飲料。樹皮から作られたカゴ。灰を軸薬にしてつくられた陶器—いずれも白樺プロジェクト事務局提供

photo
リポート



今年4月にオープンした「ジャム&カフェ タムジャム」。家具類だけでなく壁や窓枠、天井にもシラカバの木がふんだんに使われている=東川町で



シラカバの木を使った遊具をつくる「木と暮らしの工房」の鳥羽山聰さん（左）ら=東川町で

他の木に比べて幹が細いシラカバは「木材として使い物にならない」と長年言われてきた。白い幹の中心部に赤褐色の模様があったり、黒い筋が入ったりしていることも敬遠される理由だった。柔らかい木というイメージもあり、碎いてチップにして安価で取引される材料だった。

国内では戦後復興や高度経済成長のため、大量の自然林が伐採された。東川町の家具工場「木と暮らしの工房」では、シラカバの合板や無垢材を使ったソフ

アーや保育施設から発注された。代わりに針葉樹が植林され、良質な広葉樹は激減した。その結果、木材輸入の完全自由化により海外から安い木材が入ってくると、国内の林業は衰退し、広葉樹は輸入に頼る割合が高くなつた。

近年、世界的な供給不足などによって木材価格が高騰し、国産材への注目が高まっている。最近の研究で実はシラカバは密度が高く、家具材として人気のサクラなどと同等の強度があることが分かっている。シラカバは密度が高い個体差がある模様も木々の「個性」として許容する人も増えた。

シラカバは道内では更地に真っ先に生えてくる木と言われるほど、生命力が強い。広葉樹の中では人の手で効率よく育てられる可能性のある数少ない樹種だ。シラカバの価値を再評価し、持続可能な北國ならではの材料として根付かせよう」と、白樺プロジェクト実職人たちによって旭川市に発足した。

東川町の家具工場「木と暮らしの工房」では、シラカバの合板と、白樺プロジェクトメンバーによれば、最初は「木と暮らしの工房」の名前で活動を始めたが、その後、白樺プロジェクトとして活動を継続することになった。

鳥羽山さんは「広葉樹は多種多様で資源の把握も管理も難しい」と振り返る。試行錯誤を重ね、19年6月の旭川デザインウイークにシラカバ専門ブースを設け、ダイニングセッ

トや樹皮をらせん状に巻いたイスなどを販売したところ、多くの反響があつたとい

【写真・文 貝塚太一】

シラカバの木を使った遊具をつくる「木と暮らしの工房」の鳥羽山聰さん（左）ら=東川町で

樹液は飲料や化粧水、葉は染め物の原料、樹皮はカゴの素材になりふれた白い木々が、未来に豊かな暮らしをもたらすかもしれない。

シラカバだ。道内にありふれた白い木々が、未来に豊かな暮らしをもたらすかもしれない。

シラカバだ。道内にありふれた白い木々が、未来に豊かな暮らしをもたらすかもしれない。

シラカバだ。道内にありふれた白い木々が、未来に豊かな暮らしをもたらすかもしれない。